Osaka University Knowledge Archive

Title	アドルノの場所
Author(s)	細見, 和之
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49154
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【21】

氏　　名	細　見　和　之（ほそみ かずゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２１４７１　号
学位授与年月日	平成 19 年５月８日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**アドルノの場所**
論文審査委員	（主査） 教　授　木前　利秋 （副査） 教　授　友枝　敏雄　　助教授　檜垣　立哉

論　文　内　容　の　要　旨

学位論文として審査請求している私の『アドルノの場所』は、大阪大学人間科学研究科博士後期課程より主たる研究対象としてきた、戦後ドイツを代表する哲学者アドルノ（1903-1969）に関して、およそ 14 年間にわたって私が執筆してきた論文を集成したものである。

本書は９篇の論文から構成されているが、その軸となっているのは第１論文「アドルノにおける自然と歴史」および第８論文「〈自然史〉の理念再考」で中心的に論じられている、アドルノの「自然史 Naturgeschichte」という特異な概念ないし「理念」である。「自然 Natur」と「歴史 Geschichte」をたんに対立的に捉えるのではなく、自然が歴史となり歴史が自然となる事態を批判的に見据える視座、さらには、そのような視座のもとで自然と歴史の宥和をまなざす試み、それがアドルノの「自然史」という発想である。アドルノの思想は初期から後期にいたるまでこの「自然史」という特異な視座に貫かれているというのが私のアドルノ解釈の基本であって、それが本書における私のアドルノ研究の、いわば縦軸を形成している。

第１論文「アドルノにおける自然と歴史」では、初期講演「自然史の理念」（1932 年）にそくして、このような「自然史」という発想の源を、アドルノのルカーチ批判とベンヤミン受容のうちに詳しく確認している。さらに第８論文「（自然史〉の理念再考」では、この第１論文の考察を引き継ぐ形で、この「自然史」という発想が主として後年の哲学的主著『否定弁証法』（1966 年）におけるヘーゲル批判、マルクス批判として継続されていることを確認している。

これに対して、第２論文「アドルノのフッサール論を表象する試み」、第３論文「メタクリティークのクリティーク」、第４論文「アドルノのハイデガー批判、そのいくつかのモティーフについて」においては、それぞれアドルノのフッサール批判、カント批判、ハイデガー批判を主題としている。ハイデガーに対して徹底的な批判が加えられているのに対して、フッサール、カントに対してアドルノは、過酷な批判を展開しながらも、それぞれのテクストからいわば書き手の意図を超えて可能性を汲み取ろうとする。そういうアドルノの哲学的批評の手つきを、その文体にまで着目して確認するのが、これらの論文における私の意図である。この点は第５論文「テクストと社会的記憶」におけるアドルノのハイネ批評に関しても同様である。これらの論文は、アドルノの他者批評という鏡のうちに、アドルノ自身の思想の相貌を映し出そうとする試みであって、それが本書における私のアドルノ研究の、いわば横軸を形成している。

総じて、「自然史」という前記の縦軸と他者批評というこの横軸の交点にアドルノ固有の思想を浮き彫りにするこ

と、「アドルノの場所」を探ること、それが本書の全体を構成していると言える。

さらに、第7論文「思考の『遅れ』について」は、ホルクハイマーとアドルノの共著『啓蒙の弁証法』（1947年）の第5章「反ユダヤ主義の諸要素」を詳細に検討したものである。「啓蒙の限界の一つとしての反ユダヤ主義」という主題にそくして、反ユダヤ主義の思想史的なコンテキストをあらためて確認しながら、著者たちの議論を跡づけている。最後には、そういう著者たちの議論自体に「ショアー」（ホロコースト）の問題が決定的な形では組み込まれていない、という問題を指摘している。タイトルにある「思考の『遅れ』」とは、端的に言って、「ショアー」という出来事と『啓蒙の弁証法』という書物のあいだの、この決定的な遅延関係のことである。

第6論文「社会批判としての社会学」はアドルノの最後の講義録『社会学講義』を解説・紹介したものであり、最後の第9論文「アドルノの場所」はアドルノ生誕100年を記念してフランクフルトで開催された「アドルノ会議」に関する、一参加者の立場からの批判的報告である。いずれも現在におけるアドルノの思想の可能性を、私のアドルノ解釈の位置から問いかけたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文はフランクフルト学派第一世代の代表的な論客として知られるテオドール・W・アドルノの思想について、「自然史」という理念を柱の一つにして、哲学的あるいは社会学的な読解を試みたものである。冒頭の章と最後の章でこの「自然史」という理念をそれぞれ別の角度から論じて、本論文の全体的な枠組みを明らかにし、その間におかれた各章で、さまざまな哲学者・文学者にかんするアドルノ自身の批判的論考、さらにアドルノ/ホルクハイマーの共著『啓蒙の弁証法』における「反ユダヤ主義」論を考察しながら、その理念の実質的な意味を分析している。

アドルノ論を展開するさいに申請者は、アドルノの原テキストそのものを徹底して追跡していくという手法をとっている。特に印象深いのは、冒頭章の「自然史の理念」をめぐる部分である。アドルノのこの論文は、今日では「哲学のアクチュアリティ」とともにアドルノの思想的なエッセンスを語った初期の重要文献であることが認められていたが、『アドルノ全集』が出るまでは眼にされることがなく、日本では邦訳が出るまで取り上げられたことがなかった。自然史という理念は「つねに新しいものの生起によって特徴づけられる人間の歴史的世界と、太古からそこにある反復する神話的な自然の世界とが、分かちがたく絡まりあっていることを、自然を歴史として、歴史を自然として把握するという方法で示そうとしたもの」だが、冒頭章と最終章での整理の行き届いた明快かつ精密な解釈は、アドルノの思想全体におけるその意義を明らかにした点でも優れている。またこの理念にはアドルノがヴァルター・ベンヤミンから受けた影響の跡が現れたものでもあるが、本論文は、「ベンヤミンの誰よりも忠実な弟子」としてアドルノから何を学び、どのようにそれを自家薬籠中のものにしたのかが浮き彫りにされていて、その点でも学ぶところが多い。フッサール、カント、ハイデガー、ハイネなどにかんするアドルノの批評・批判を扱った章では、アドルノの論考を丹念に追うだけではなく、そこで取り上げられた哲学者・文学者の思想的内実についても申請者に深い造詣があることを示している。『啓蒙の弁証法』にかんする解釈で目に止まるのは、同書のなかではこれまであまり取り上げられることのなかった「反ユダヤ主義」の章を取り上げ、その丁寧な読解から、ミメーシスやイデオジンクラシーといった同書の基礎概念を照射する試みが行われていることである。

本論文を通読して受ける印象は、アドルノを解釈していくさいの申請者の視点と問題意識とにブレのない一貫性を誇っている点、しかもそれらに著者なりの優れたオリジナリティを見てとることができる点である。オリジナリティといっても、アドルノ解釈において特異な見解だというのではない。たとえばベンヤミンとアドルノとの関係を重視していく解釈などは、アドルノ像を深めていく上で、ここしばらくの研究状況では研究者の間で比較的注目されてきた論点である。そうした流れに棹さしながらも、しかし著者固有の解釈、読解の手法になっている点（たとえば「自然史の理念」にこれだけ着目した所は著者固有のものである）で、オリジナルといえる。

こうした学術論文としての独創性に優れている点でも、同論文が博士（人間科学）を授与するに十分のものと判断した次第である。